

外部評価議事抄録

(1) 評価会議の進行概要

初日(1月14日)は、防災研究所の大会議室にて外部評価会議を行った。冒頭に、井上所長から外部評価の趣旨説明がなされ、岡田憲夫自己・点検評価委員会委員長からスケジュールの説明があった。午前の部は7人の外部評価委員が、各部門・センターを訪問し、資料書面では把握できない事項についてヒアリングを行った。

その後、大会議室に戻り、外部評価委員と所長、所長補佐、部門長・センター長とが一緒に昼食をとりながら、ヒアリングの補足などを行った。また、一部の委員は技術室を視察した。引き続き午後の部は、岡田委員長の司会により再開。所長および小尻利治将来計画検討委員会委員長から、研究所の概要、将来構想、日本の国立大学の昨今の事情(法人化や制度上の制約など)について説明した後、各部門・センターから、スライドと資料を用いた活動報告がなされた。各報告に対し熱心な質疑応答が午後6時半頃まで続けられた。

2日目(1月15日)は、化学研究所共同研究棟大セミナー室において行われた。防災研究所の大半の教職員の参加のもとに、宝馨自己点検・評価委員会委員の司会により午前9時30分に開会した。まず、井上所長、小尻将来計画検討委員会委員長より前日の質疑応答に関して若干の補足説明をした。8人の外部評価委員から講評を10分程度ずつお話し頂いた。その後、外部評価委員の講評に関していくつかの質疑応答がなされ、最後に岡田自己点検・評価委員会委員長が総括した。定刻正午に行事を終えた。

(2) 1日目午後の外部評価会議の要約

1月14日午後に行われた外部評価会議の要点を以下に示す。

1. 防災研究所全体について【井上所長・小尻教授】

- ・防災研究所の歴史
- ・独立法人化(国立大学法人)
- ・中期計画・中期目標
- ・主な研究プロジェクト
- ・2003年度の予算と今後の展望
- ・スタッフについて(年齢構成など)
- ・国際協力
- ・改組の基本案
- ・外部評価者への期待

[質疑応答]

【片山委員】防災研究所のミッションとは何か?

→回答については全体討論を参照

【藤野委員】防災科研との違いは何か?

→附置研究所として大学の枠で研究しているところ。

2. 各部門・センターについての説明と質疑応答(説明についてはプレゼン資料を参照)

2.1 総合防災研究部門【多々納教授】

【Hipel委員】全体でたくさんの部門があるがHUB的な役割を期待されている。

2.2 地震災害研究部門【中島教授】

2.3 地盤災害研究部門【井合教授】

【伊藤委員】地震に伴う山の崩壊がおきそうなところは予測できるのか?

→地質学的なアプローチで予測を行おうとしている。この流れで研究を進めればわかると考えている。台湾の例なら見つけることも可能であった。

2. 4 水災害研究部門【寶教授】

【Burges 委員】 学生の数や割合はこれでいいのか？

→回答については全体討論を参照

【片山委員】 外国調査の目的は？

→日本の災害と共通な部分、違う部分を明確にすることで、日本の防災に役立てる。

2. 5 大気災害研究部門【岩嶋教授】

【Wang 委員】 他の研究部門との **collaboration** はあるのか？

→いろいろとやっている。これは他の部門・センターの問題でもある。

2. 6 災害観測実験センター【中川教授】

2. 7 地震予知研究センター【Mori 教授】

2. 8 火山活動研究センター【石原教授】

【伊藤委員】 桜島の噴火様式は変化したが、また戻ろうとするのか？

→次のステージでは大噴火、粉砕もありある。

【Burges 委員】 誰が予知結果を使うのか？

→鹿児島県の自治体が、予知結果を使って行動を決めている。

2. 9 水資源研究センター【小尻教授】

2. 10 巨大災害研究センター【河田教授】

【藤野委員】 からの要望で 21 世紀 COE について説明を行う。

2. 11 斜面災害研究センター【佐々教授】

【Burges 委員】 多くの国の人に貢献するためには多くの国で理解できるように研究結果を加工すべきでは？

→多くのカラー写真や図を使って **Visual** な刊行物を作ることが重要と認識している。

3. 総合討論

1, 2の結果から討論すべき課題として、以下の4点が挙げられた。

- (1) 防災研のミッションとは何か？
- (2) 誰のための研究なのか？
- (3) 部門・センター間や他の研究機関とはどう連携・共同すべきか？
- (4) 教育に関してどのように考えるか？

総合討論では、特に (1), (4) について、以下のような議論がなされた。

(1) 防災研のミッションとは何か？

- ・研究所としてのミッションと個人の研究としてのミッションがあるが、現在ははっきりと切り分けられているわけではない。個々の研究は新しいものに向かっていくので、全体として完全な舵取りは不可能である。
- ・ミッションは短く、明確であるべきである。
- ・対象とする災害も時代とともに変わってくるのではないか（例えば **Biological Disaster** などは次世代の災害と考えられる）。
- ・明確なミッションを作ることにより研究に縛りが出る可能性もある。自由な発想で研究できる部分に学際的でよい部分がある。しかし、この考えは危険性もはらんでいる。例えば、防災研として行くべきでない方向に向いているプロジェクトに参加することも可能であるから。
- ・中期目標こそが防災研の目指すべき方向性を示しているはずなので、ここからミッションが作れるかもしれない。

(4) 教育に関してどのように考えるか？

- ・現在 150 人程度の大学院生が在籍している。Max は 220 人ぐらいになると思うが、少なすぎるとは考えていない。
- ・社会人ドクターなどをもっと有効に活用すべき。

4. その他

【藤野委員】 より、今回の評価委員会について、以下のようなコメントがあった。

「各部門・センターからのプレゼンは、総合討論での内容を議論するためのプレゼンでは

なかったと思う。議論したい点に焦点を当てた委員会の進め方も必要である。」

(3) 2日目の質疑応答採録

以上の講評を頂いた後で、下記のような質疑応答があった。

司会（寶教授）：まずは、外部評価に対する所長からのリプライをお願いします。

井上所長：まず、外部評価委員の先生方に、厚くお礼を申し上げます。われわれにとって、面映ゆい評価も、厳しい評価も頂きました。

外部評価、および、それとセットになった研究所の改組の問題は、法人化の問題と絡んでいます。最大の焦点は、大学の個性化です。大学の個性化を打ち出す要素が、附置研究所の存在だと私は思います。その点、京都大学には、いくつかの伝統あるユニークな研究所があります。では、防災研はどうか。大学の個性化に貢献しているか。今後、これが問われます。法人化されれば、研究予算なども、大学内での配分になります。まずは、防災研として、大学内でその存在理由・意義を示さねばなりません。そのためにも、今回頂戴した外部評価を十分に生かしていきたいと思えます。

具体的には、特に、研究所の教官は講義負担が少ないのだから、学部教官の2倍成果を出せ、という指摘は身につまされました。2倍は無理と思えますが、今後努力していきたいと考えます。また、共同利用施設としての実態に後ろめたいものがあるのも、事実です。研究所内での研究連携が弱いとの指摘も、その通りと思えます。

いずれせよ、こうした指摘を踏まえて、今後いっそうの改革を図っていきます。2日間、ありがとうございました。

司会：(井上所長コメントの英訳+) 次は、将来計画検討委員会委員長の小尻先生からお願いします。

小尻教授：まずは、外部評価委員の先生方に、厚く御礼を申し上げます。

若干、言い訳めいたことを申します。個別の研究領域ではなく、災害学、防災学の確立を、というコメントがありました。われわれとしては、たとえば、そうした方向の集大成として、「防災学ハンドブック」を出版するなどしてきました。また、ここ2、3年、今後の研究テーマ、組織体制についても内部で何度も話し合ってきました。さらに、研究所内部での部門を越えた共同研究が少ないとの指摘もありましたが、若い世代を中心にその実績、機運が始めているのも事実です。

井上所長をトップとする新体制が始まって、まだ9ヶ月。目下、英語による講義、研究所内のスタッフのコラボレーションなど、いろいろな改革を進めているところです。その進捗状況を見てもらいたいと思えます。さらに、女性スタッフの登用については、われわれも、その方向で考えているが、他方で、女性としてではなく研究者としての評価を、という声もあるので、この点配慮を願いたいと思えます。

司会：(小尻教授のコメント英訳+) では、フロアーからのご意見を承ります。英語でも日本語でもどうぞ。

中島教授：Hipel 先生に質問です。「アダプティヴ・マネジメント」とは何ですか。具体例を交えて説明をお願いします。

Hipel 委員：「反省的」にしかとらえられないリスクというものが存在します。たとえば、未知の化学物質による未知の河川汚染などを考えて下さい。すべてを予め予測しておくことは不可能です。こうしたリスクが存在したことは、あとから、「反省的に」わかるだけです。ただし、可能な限り多様な事態にアダプトできるよう、また、フレキシブルにリスクをマネジメントするよう準備することは可能です。しかも、こうした研究は、自然科学、意思決定科学、その他さまざまな研究領域が共同しなければ実現不可能です。これが、アダプティヴ・マネジメントの基本となる考え方です。

中島教授：ありがとうございます。すべて理解できたわけではありませんが、時間の制約もあるので、今はこれで結構です。あと、Borges 教授にごく短い質問です。先生の配布資料に、「1月16日」とありますが、今日は日本時間で15日ですよね。これ、わざとこうされたのですか。(笑)

Borges 委員：この資料、ぜひ、明日も、読んで下さい。(笑)

中島教授：ありがとうございました。(笑)

司会：他にございますか？

Mori 教授：一つコメントを。日本人の委員の先生方によるコメントと外国人の先生方のコメントには、いくらか違いがあるようです。前者には、日本の大学の実状、システムを知った上でなされた実際的なコメントが多く、その実現も、比較的容易なものが多いように思います。他方、外国人の先生方からのコメントは、国際的な視点、スタンダードから見たとき、防災研究所がどのように映るかを指摘したものになっていると思います。そのすべてを実現することは不可能でしょうし、中には、日本の大学の現状を踏まえると、少なくとも現時点では、いくらか不思議な感じのするコメントもあったと思います。また、われわれが、米国の大学になれるわけではありません。しかし、外国人の先生方のコメントには、われわれがそれを真摯に受けとめ、今後実現を目指すべきポイントがたくさん含まれていた気がします。本日は、ありがとうございました。

司会：他にございますか？

Hipel 委員：われわれ全員を代表して、もう一度、皆さんにお礼を言いたいと思います。所長、寶先生、岡田先生をはじめ、皆さんで準備頂いた今回の機会を、われわれは心から楽しむことができました。ありがとうございました。

Wisner 委員：私も、今回の評価を通して、多くのことを学ぶことができました。

ここで、独立行政法人化とからんで、一つ短いコメントをさせて下さい。プラバタイゼーション(法人化)には、負の側面があります。それは、一言で言えば、研究成果の「需要と供給」の関係に関わります。今、世界では、水害、地滑りなどのハザードに直面している人々、地球規模の環境変化によって危機に直面している人々がたくさんいます。このうち多くの人々は、言わば、(防災研究の)需要がありながら、それに対する対価を払うことが出来ない人々です。他方で、今後、防災研の21世紀的ミッションを、ファイナンスの面も考慮しつつ考えていくためには、「売れる商品」を生産する必要があります。つまり、われわれは、売れるものを作るのか、売れなくても必要のあるものを作るのかという葛藤に苛まれることになります。

私のプレゼンでも触れたように、1970年代半ば、私がかつて、東ケニアで渇水の研究をしていた当時、そのプロジェクトは、100%政府出資の公的な研究でした。だから、どこへでも自由に行けましたし、たとえば子どもたちを救援するようなことも可能でした。しかし、2003年の今は、まったく違います。各研究者は、自分の食い扶持は100%自分で稼がねばならず、これを2年続けてできないと職を奪われます。

さて、科学の根底は、疑問を感じることです。回答を出すことではなくて。世界で、今何が問題かを同定することが大切なのです。よって、英国におけるプライバタイゼーションの流れがもたらした結果に見られるように、この疑問を感じるプロセス、つまり、何が問題かを考えるプロセスが、市場の原理にのみ支配されるならば、それは大変危険です。稼げる研究にのみ、研究者が流れていくからです。費用という対価を払えない人々を対象にした研究についても思いを致さねばならないと考えました。ありがとうございました。

司会：何かコメントはありますか？

小尻教授：何か言わないと、われわれが、指摘をすべて認めたみたいなので、一言だけ。まず、世界的なセンターになるべきという意見も、非常によくわかる。もうひとつ、片山先生から指摘があったように、研究所のミッションをはっきりさせよ、ということがあります。市民なのか、世界的研究なのか。今後、このことを、われわれとしてははっきりと打ち出していきたいと思います。

司会：(小尻教授コメントの英訳+)では、ご意見も尽きたようなので、これで質疑応答を終

えます。最後に、自己評価委員の委員長の岡田先生に登壇いただきます。

以上の質疑応答の後、岡田自己点検・評価委員会委員長がこの外部評価会議を締めくくった。講評を聞きつつ、評価委員のいくつかのフレーズを短い時間の中で引用しながら、次のように総括を行った。

- ・ 今決めることが、将来を決する (Choice is Today, Determines Tomorrow)
- ・ 掛け値なしの世界のリーダーを目指す防災研究所 (DPRI Towards Undisputed World Leader)
- ・ 挑戦的で取つきやすい研究環境を醸成 (Foster a Challenging Friendly Research Environment)
- ・ 研究協力、特に内部での協力 (Coordination, Particularly Internal)
- ・ 手を広げすぎず質の高いものを (Do Less But Better (Do It Pinpointed And Strategically))
- ・ (日本人特有の) 恥の文化からきらりと光る文化へ (Shy Culture To Shine Culture (DPRI's Research Culture?))

締めくくりに、ウィズナー教授が防災研究所の五十余年の歴史に思いをはせて詠まれた英語の詩歌を岡田教授が紹介された。

Since nineteen fifty with single trunk and deep roots; Tree with much ripe fruit.

五十年幾星霜 いとけき幹や地深く根づき 育てたわわに研究の実り (岡田憲夫訳)